

ラテンアメリカの地誌学習—復習を中心とした授業の一例—

名古屋市立菊里高等学校 山岸政雄

1. はじめに

先日、本格的な地理学習をやっていない時期の2年生に対して、ラテンアメリカについてのアンケートを実施した。アンケートでは、アングロアメリカとラテンアメリカの境はどこかを尋ねた。その結果、正解率は43%で、間違えた生徒の方が多かった。誤答の例としては、「南北アメリカの境」「メキシコの南」「カリブ海の南」とする場面が多かった。また、ラテンアメリカのイメージを聞いてみたところ、「サッカーが強い」「暑く情熱的」「発展途上国」「チリ鉱山落盤事故での救出」「日本の反対側」などのイメージが出された。アンケート結果をみると、生徒はラテンアメリカという地域を「まとまりある地域」として理解していないようだ。『新詳地理B 初訂版』では、p.265～267でまとめられているが、中学校では本格的にこの地域を学習したことがなく、他地域に比べてラテンアメリカ全体としての知識が不足していると思われる。

現勤務校は、ほぼ全員がセンター試験を受験する学校で、国公立進学者もかなり多い。センター試験での地理受験生徒は、文系で20人、理系で120人程度である。2年時は2単位で、国家群・都市・人口・民族など現代世界の諸問題を中心に授業を行い、3年時は4単位で、地形・気候からスタートし農業・鉱工業・地誌の順で授業を行っている。系統地理学習が中心で、地誌は最後のまとめとして扱っている。今回の報告は、3年生に対して行っている授業プランであり、地誌学習は、今まで学習した系統地理分野の総まとめとして、復習中心で授業を行っている。

2. ラテンアメリカの概観

まずは、ラテンアメリカ全体の位置や地名について、『新詳高等地図 初訂版』（以下、地図帳）p.73～74で確認させたい。

ラテンアメリカは、世界で最も格差が大きい地域である。その原因の一つにヨーロッパ系ラテン民族（以下、ラテン系民族）がもち込んだ大土地所有がある。



『新詳地理資料 COMPLETE 2011』 p.187②激しい貧富の差

そこで、農業分野で学習した大農場のファゼンダやエステランシアについて復習する。また、都市分野で学習した、先進国とは異なるスラムの形成と立地をおさえることもできる。

ラテンアメリカの歴史的側面については、インカ帝国の支配地域とラテン系民族による植民地化が重要である。この地域はラテン系民族による植民地化によって、カトリックが一般的になった。この部分では、ヨーロッパの三大民族と宗教との関係をしっかり復習したい。この地域の大部分はスペインの植民地であるが、ブラジルのみポルトガルの植民地である歴史的背景も知っておきたい。

その後、プランテーション労働力として黒人奴隷がアフリカから強制移住させられ、混血化も進み、現在の人種構成が形成された。人種構成の地域的相違は、気候と歴史との関係が強い。混血、ヨーロッパ系、先住民、ア

■ なぜブラジルはポルトガル語か？ ■

多くの国がスペイン語を話すラテンアメリカで、なぜブラジルだけポルトガル語なのか。大航海時代、新大陸に進出したスペインは、海外での領土を、大西洋を境にポルトガルと2分割する案をローマ教皇に提出した。しかしポルトガルはこの案に反対し、1494年、西経45度付近に領土分界線を定めた。それがトルデシヤス条約で、この結果、ラテンアメリカではブラジルはポルトガル領、その他の国はスペイン領となった。そのため、ブラジルはポルトガル語を話す人々が多いのである。

Link p.185

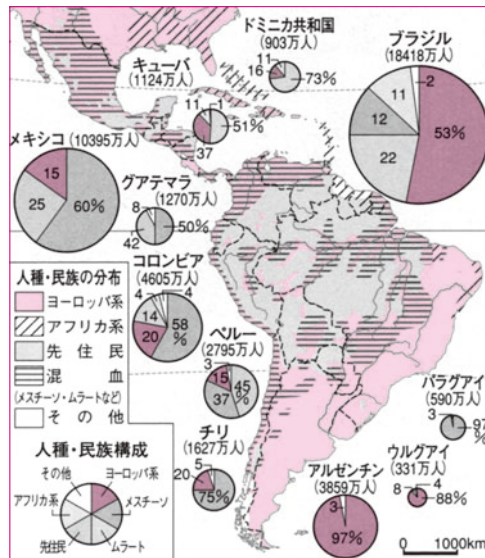
『新詳地理資料 COMPLETE 2011』 p.186

フリカ系など国によって大きな違いがある。この違いは、ラテンアメリカを理解するポイントになる。

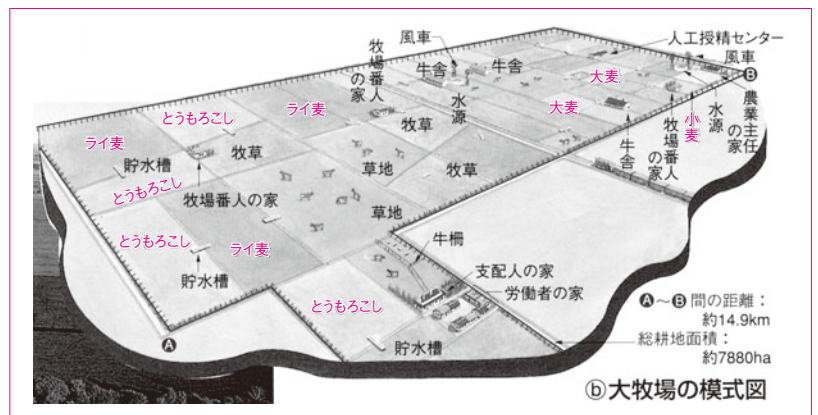
3. ラテンアメリカの気候と地形

気候学習では、最初に、黒板にラテンアメリカの気候区地図を描き、それぞれの気候区に番号をつけて生徒に答えさせることから始める。その際、前提として、赤道の位置を確認しておくことが大切である。なかなか正解にたどり着けないが、ヒントを出しながら粘り強く行うようにしている。気候で学習した「仮想大陸の気候分布」が参考になる。ここでのポイントは、以下の点である。①赤道を中心に南北対称。②大陸西岸の海岸砂漠であるアタカマ砂漠と寒流の影響。③南緯30～40度の大陸東岸(Cfa)と大陸西岸(Cs・Cfb)の違い。④アンデス山脈を中心にH気候(ラパスやキトが有名)が分布。⑤アンデス山脈にぶつかる偏西風の風上側と風下側の降水量の違い。⑥植生として、パンパ、セルバ、リャノ、カンポなどの地域名と気候区とを関連づける。その際、南半球有数の農業地帯であるパンパを取り上げ、気候の違いによる農牧業の特色と農業地域として発展した理由(小麦カレンダーによる収穫期の違い、冷凍船の就航など)をおさえることもできる。

同様に、黒板にラテンアメリカの大地形区分地図を描き、番号をつけて生徒に答えさせる。安定陸塊としてブラジル高原を取り上げ、安定陸塊に多く分布する資源として鉄鉱石産地(ブラジルのイタビラやカラジャス)をおさえる。次に、新期造山帯としてアンデス山脈とカリブ海周辺を取り上げ、新期造山帯に多く分布する資源として、原油(ベネズエラ、エクアドル)と銅(チリ)をおさえる。石油の復習として、OPECの加盟国を確認したい。この機会に、地図帳裏表紙裏⑤を参照し、「世界の地体構造」をおさえたい。なお、この地域に古期造山帯はほとんどみられず、エネルギー源としての石炭産地は少ない。このことからブラジルにおけるエネルギー利用を考えさせ、発電の最大の特徴である水力発電(約80%)とエネルギー資源としてさとうきびを利用したバイオエタノールに結びつけることもできる。

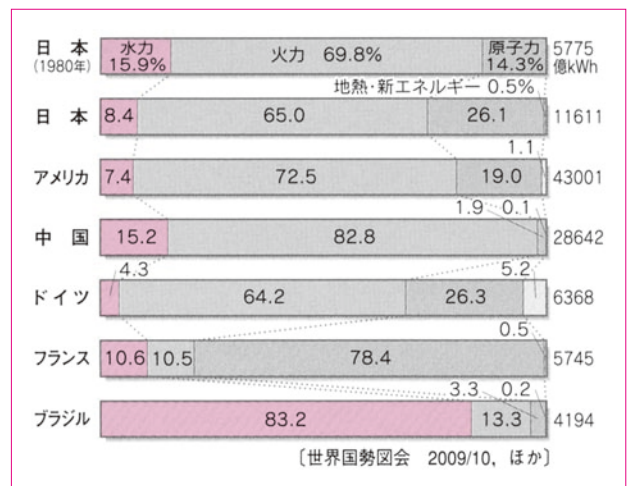


←『新詳地理B 初訂版』p.266
①ラテンアメリカの人種・民族構成
↓『新詳地理資料 COMPLETE 2011』p.58
②⑥大牧場の模式図



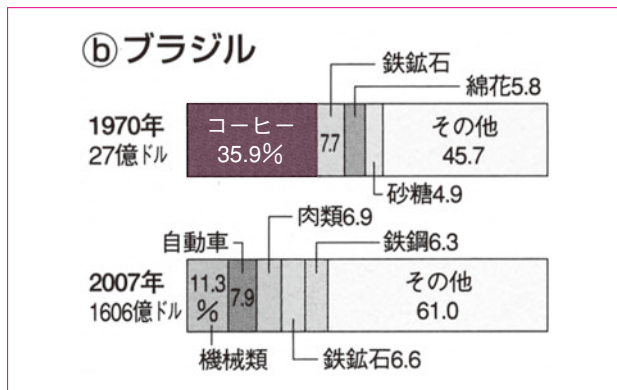
4. ブラジルの地誌

ラテンアメリカを代表する国であるブラジルを取り上げる。人口・面積とも世界第5位であり、BRICsの一員として今後の経済発展が期待されている国である。ブラジルといえば、コーヒーのイメージが強い。コーヒー栽培に関して、テラローシャやファゼンダ、コーヒー原産



『新詳地理資料 COMPLETE 2011』p.91
①おもな国の発電量の内訳(2006年)

地などを復習する。コーヒーの国ブラジルは生産こそ世界一だが、現在ではコーヒーの輸出割合は減少し、コーヒーのモノカルチャー経済から大豆、さとうきび、とうもろこしなどの農産物の多角化と鉄鋼、自動車、鉄鉱石などを輸出するラテンアメリカ最大の工業国になっている。アジアの工業化の過程でよく登場する輸入代替型工業から輸出指向型工業への変化をおさえない。この変化は、ブラジルの輸出品目の変化で読みとりたい。



『新詳地理資料 COMPLETE 2011』 p.122
③ 各国の輸出品の変化

近年、MERCOSURによる地域経済連合が組織されていることも取り上げる。国家群のまとめとして、世界の経済組織や国の人口・GDP・面積・貿易額を比較するとそれぞれの経済組織の特徴が理解しやすくなる。私は以下の表にある八つの「国家群と国」や「人口」を空欄にして生徒に答えさせ、それぞれの特徴を比較させている。

5. まとめとして

ラテンアメリカは、言語と宗教の共通性からほぼ一つのもまとまった地域としてとらえることができる。これは

ヨーロッパ世界（とくにラテン系民族）からの広がりという側面をもっている。一方、経済的には発展途上国であり、依然としてモノカルチャー経済が続いている国が多く、アジアやアフリカに近い経済構造をもっている地域である。

ラテンアメリカの地誌は、①地形と気候 ②人種構成・公用語・宗教 ③大土地所有制と農業 ④各国の輸出構成などでまとめることができる。とくに、各国の貿易輸出統計を比較することで各国経済の現状や変化を理解することは大切である。輸出品目を通じてラテンアメリカ各国の違いをしっかりと理解したい。

時間的に余裕があれば、「アマゾン熱帯林の環境破壊」「日系ブラジル人の歴史と日本での日系人の現状」「ペルー海流とエルニーニョ」「メキシコシティの都市問題」などを扱うことも考えられる。

時事問題は、トピックス的に使うと生徒の興味を深めることができる。たとえば、昨年の子リ鉱山の救出劇を「銅鉱山」として知らせ、チリにおける銅産出の重要性を関連づけることができる。また、ブラジルは、今後ワールドカップサッカー大会やオリンピックが開かれ注目度が一層高まるので、時事問題を織り交ぜながらブラジルの地誌を扱うことも可能である。

この地域は、「まとまりある地域」として扱うことが少なく、系統地理の各分野で個別に扱うことが多い。地誌学習は大切であるが、実際には系統地理に時間をとられ、時間的に地誌をじっくり扱うことはできない。復習中心に大事なポイントを自然地理と関連づけて整理することは大切である。自然地理との関連性が薄いと、知識の羅列に陥りやすい。できるだけ地形や気候から人文的の事象を結びつけることが必要だと思う。

国家群や国の規模の比較

国家群と国	人口 (億人)	GDP (千億ドル)	面積 (万km ²)	輸出額 (百万ドル)
MERCOSUR	2.7	1.8	1279	29.0
EU	4.9	16.8	441	521.9
NAFTA	4.4	16.1	2158	185.1
ASEAN	5.6	1.2	448	86.1
中国	13.9	3.2	960	121.8
インド	11.3	1.2	329	14.6
ロシア	1.4	1.2	1710	35.2
日本	1.3	4.4	38	77.7

統計は2007年

『地理統計2010』などより筆者作成